

<講演記録>

第30回京都工芸サロン

京都の伝統産業とふれあい館

(2018年2月7日開催)

京都伝統産業交流センター専務理事

八田 誠治

司会者 それではこれから第30回京都工芸サロンを始めたいと思います。政策学部の白須です。今日のテーマは「京都の伝統産業とふれあい館」ということで、京都伝統産業交流センターの専務理事をされております八田誠治さんからお話しいただきます。この京都工芸サロンは2002年に京都産業学センターができて以来、伝統産業の実際業務に携わっている方々にいろいろなお話をしていただくということですが、今回、より包括的に京都の伝統産業についてお話していただこうということで、京都の伝統産業とふれあい館というテーマでお話ししていただくことになりました。

八田専務は1951年3月京都生まれの京都有ちで、京都工芸繊維大学の大学院を修了されました。染めと織りがあります京都市染織試験場の織りのほうで、機織部の研究員として活躍されました。染織試験場は工業試験場と一緒にあって繊維技術センターとの名前の変更があり、現在は独立法人京都市産業技術研究所となっています。2011年に産業技術研究所をご退職されて、その年から岡崎の「みやこめっせ」の地下にあります「京都伝統産業ふれあい館」の館長として、伝統産業各業界の伝統産業を展示し、新しい工房の巡りとかそういったことにも最近取り組まれているということです。

今日は八田さんのほうから、京都の伝統産業のお話、その中でふれあい館がどういう役割を果たしているか、果たしていくべきか、ということにつきまして、大体1時間30分弱ほどお話ししていただいて、質疑応答も踏まえて8時半少し前には終わりたいと思っております。そのあと京都産業人倶楽部で簡単な懇親、交流の場も持ちたいと思います。それでは、八田さん、よろしく願います。

講演内容

はじめに

ただいまご紹介にあずかりました京都伝統産業ふれあい館の館長の八田でございます。行政的には「京都伝統産業交流センター」の専務理事って堅苦しい名前がついていますが、ふれあい館の館長ということでお話させていただきます。第30回の京都工芸サロン、それにふさわしい中身になるかどうかわかりません。雑駁な話になるかと思えますけれども、よろしく願います。

タイトルが「京都の伝統産業とふれあい館」となっていますが、少しふれあい館の宣伝をしたいということです。なぜかといいますと、3年ほど前に（公財）京都文化交流コンベンションビューロから「土居課長」が異動で来られ、そのときに京都市の職員でふれあい館って何人知ってるか？というアンケートを取られて、ほとんどの方に知られていないということでした。「これはいかん、ちょっと啓蒙せなあかんやないか」ということで、タクシー業界の方を集めての講習会で、MK タクシーさんとヤサカタクシーさんからそれぞれ100人ずつ来ていただいたんです。そのとき冒頭に、京都駅の駅前のタクシー乗り場で、「すみません、京都伝統産業ふれあい館行ってください」って言われて、ずっと行ける人、何人いはいりますかと聞いたら、誰も手が挙がらなかったんですね。「そんなものどこにありますね」と。「いや、みやこめっせの地下ですわ」「みやこめっせは知ってますわ」と。地下にそんなものありますかとか。そういった中に、「私、海外の方を昔連れていったお覚えがありますわ」、とかそういうのがぼろぼろ返ってくると。これではいけないということで3回ほどやらせていただき、ちょっとふれあい館を宣伝をしたいということです。

京都伝統産業ふれあい館とは

まず京都伝統産業ふれあい館って何？と大上段に振りかぶってみました。まず初めに京都の誇る74品目の伝統工芸品がここへ来たら一度に見られます。例えば友禅とか清水焼とか、個々の伝統産業を置いているところはいろ

いろいろあります。例えば久留米へ行くと久留米の絣が見られるところへ連れていって言ったら、タクシーの運転手はすっと連れていってくれる。京都で「清水焼を見たい」と言ったら、清水焼の会館や、東山五条連れていってくれる。ところが伝統産業ふれあい館って！何それ、どこや！と。いや、実は来たら74品目の伝統工芸品のすべてが見られるますよ、という仕掛けを広めないといけないということです。

それと2番目にここへ来ていただくと、職人さんが実演しておられるということ。摺型友禅ですが、これは、私が赴任する前から、ほぼ20年ほど前から実演を行っているということです。それとちょっと口はばったいですけど、専門のスタッフによるガイドツアーもOKということで、私を含めて2人ほど案内できるようにしております。最近、ベラルーシ出身の4カ国語を話す女性の方に来ていただいて、フランス語と英語も対応できるようにしております。

また今から6年ほど前に、毎日曜日に舞妓さんに来ていただき、踊っていただくという企画をしました。ふれあい館には今、年間約16万人の入館者がいます。ところが6年ほど前には20万人いた入館者数がだんだん右肩下がり落ちてきた。どうしようかと、考えてると、当時の副市長が、「簡単やんかいな。舞妓さん、立たしいな」と。「舞妓さんというのは頭の先から足の先まで京都の伝統工芸品を身にまとったはなのやろう。それを縷々説明したええんや」「ついでに踊ってもらったらええや」ということで、入館者数の増加を見込めました。今、毎月第3日曜日は舞妓さんで、第4日曜日は芸妓さんです。これが実は長年やってますと、追っかけがいて、誰々の舞妓さんが、来月は誰が出るんやと、カメラ小僧みたいな人がいっぱい追っかけ回して、本来の趣旨からちょっとはずれているのとちがうかと。ほちぼち来年あたりに有料化の見直しをしないとイケないのとちがうかと。だけど無料ということで、一つこれがネックになっております。

それから今、無料と言いましたが、入場料が無料でございます。実はトリップアドバイザーで無料での見学箇所で、ベストファイブに入りました。1位はお稲荷さんです。2位3位は桂離宮と修学院離宮です。ところがそこと肩を並べるのではないけども、ふれあい館ってだいぶん上位に上がって

いった。日本人よりも海外の方のほうがよく知ってもらっている、というような状況でございます。それからほぼ年末年始を除いては無休ということと、それから岡崎の文化エリアにあるということと、駐車場があるということでございます。

次のポイントは、若手の伝統産業の職人さんとのネットワークが非常に強くなってきたということです。これには、若手の GM（ゼネラル・マネージャ）として吉澤氏が活躍しています。「ちょっとこの実演に東京行って」というときに非常にフットワークが軽くなったということです。

一番最後に書いてます「伝統産業のことならまずお気軽にふれあい館にご相談を」というのは、実はタクシー運転手さん向けのキャッチコピーでございます。というのは、某タクシーの運転手さんに、お客さんを乗せてたら陶器見たいさかい、どっかええとこ連れて行って、いや、指物見たいのやけど、竹製品が見たい、よう聞かれるんですわ。そういうときはふれあい館にすぐ電話してくださいというつながりです。1 年半ほど前スリランカの方が、「お地蔵さんを買いたいけどどこに行ったら買えるのですか」という話で、東京から鎌倉から名古屋からずっと来たけども、お地蔵さんがなかったとのこと。木のお地蔵さんやろうな。どこやろう。西本願寺、東本願寺どっかの仏具屋さん行ったら、お地蔵さんの木彫りあるのとちがうかなとそこに繋がせてもらったら、すっといけました。そういう意味でタクシー業界の方に気軽に使ってくださいよということでこういうことさせていただきました。

ものづくりの街・京都

今までは、ふれあい館の宣伝で、実は私がいつもしゃべっている話です。ここにおられる方には釈迦に説法の話が多々あるかと思いますけど、ちょっとお耳汚しでよろしくお願ひしたいと思います。

まず初めに、いつも言うのは京都というのは、観光で儲けてる街と違う。ものづくりの街ということです。伝統産業 VS 先端産業という構図で、伝統と先端の調和の取れた街ですよ、ということを他府県の方には強調しております。特に伝統産業というのは京都の基幹産業ですよということを、あまりに大げさかもわかりませんが、位置づけをしていきたいなと思っておりま

す。そして門川市長がいつもおっしゃってるように、1200年の歴史都市であって、パリ、ロンドンとかと比べて、産業活動をしている街というのは、京都しかない。ものを作って都市機能として1200年もやっているところといったら京都しかないということも、強調させてもらってます。

次の話をすると、意外という京都の市民の方もいらっしゃるんですけども、青字で書いてある京都の一部上場している大企業です。元は伝統産業が創業であったところですよ。これを言うと、「へ、そんなんあったん」とか、いう話が時折、返ってきております。

一番初めの京セラさんですけども、もともと京都セラミックスといって、碍子（ガイシ）を作っておられたとか。ヒューズボックスって、陶器の石けん箱みたいなのがあって、鉛の線があって、電気が流れたら、ぱちっと飛ぶという、そういうものを焼き物で作ってた。今はブレーカーといいます。そこからいわゆる今のコンピュータに変わったというような話をすると、「そんなもんを昔は作ったはったんか」とか。

それから真ん中の島津さんは、もうご存じの方いらっしゃいますけども、もともと明治の初めの頃は、仏壇仏具のおりんとか、花入れとかろうそく立てを作る鋳物屋さんやったけども、廃仏毀釈ということで、三十三間堂の前に、沢山の仏壇仏具や、釣鐘とか集めて処分されたという。それ見て、「こらえらいこっちゃ！明日から、わしこんなもん作ったらあかんわ」ということで、方向転換をしようと思ったときに、舎密局（せいみきょく）という明治政府が作った勉強するところへ目をつけられた。源蔵さんが行って、そこで勉強してキュリー夫人がレントゲン発明した10年後にはレントゲンを作らした。それとGSバッテリーという、GSというのは、Genzo Shimazuの頭文字をもっているということで、バッテリーの原理もそこで考えついた、という話をしております。

任天堂さんは、これは皆さんもよくご存じです。「そやそや、昔は花札やとか百人一首やとかかるたを作ったはったとこやな」。それが今、TVゲームの総合メーカーということです。

意外とこの中で、へえと言われるのが、実は第一工業製薬なんです。今の鉄道博物館のあるところ。あそこはモノゲンさんというて第一工業製薬の大

きい工場やったんです。機関車の貨車がそのまま入ってきたぐらいです。そこでいわゆる玄武石鹸とか、モノゲンとか、年配の方は聞かれたことあるでしょう。もともとここは薫玉堂さんといって西本願寺の向かいのお香屋さんの新宅でした。明治の初めの頃にシャボンというか、石けんが入ってきたとき脂肪酸ナトリウムというウシの牛脂とか、何かの油と苛性ソーダを混ぜたら石けんができるんですが、ちょっと臭い。それでは、本家にあるお香入れて、においがおさまるといことで、石けんを広めはった。ここも一応伝統産業。

この他の、山科の福田金属さんとか、松風さんとか、宝酒造、月桂冠全部。これらの企業のベースはみんな伝統産業であったことを、宣伝しておきます。

創業 200 年を超える老舗

京都市内の企業で、軽薄短小と重厚長大とでは、比べたら軽薄短小のほうが多いです。それと中小零細企業ということで、従業員が4人ぐらいの零細企業が65%もあります。社長がお父さんで、経理部長がお母さんで、長男が宣伝部長で、嫁さんが福利厚生部長みたいな感じです。「ところで、社長で何代目です？」と尋ねたら、「わしが8代目かな?」「いや、うち、家系図見たら慶応から続いて10代目ぐらいやとか」いう。え?という店がいっぱいあるということです。そんな話が実はこの老舗ということです。

大体、老舗100年ということで、その土地で商いとかものづくりをして、3代以上続いて、ずっと同じ場所でやっていると老舗100年といって、商工会議所等から顕彰されて、金看板もらはる。京都の伝統産業関係では100年では、中々、老舗と認めてもらえへん。また、「100年の金看板」もらったと派手なパーティをやると、「景気のええことですか」と京烏にいやみを言われます。200年を超えないと京都ではいわゆる老舗として言うてもらえないのと違うのかなというような条件が出てきます。

ここに書いていますように、日本には創業200年を超える老舗の企業が3146社もあり、世界でも一番多いですね。そのうち七つは1000年以上の歴史を有しているということで、ラジオのa-ステーションでも、「京都には1000年を超える企業がある」といつもキャッチコピーで言ってますけども、

その一つに田中伊雅仏具店（現在の京仏壇・京仏具組合の理事長）、がございます。このお店は創業が仁和年間の885年頃ということです。794年、都を置かれたちょっと後にもう創業しているということです。どういふ話かと聞くと、当時、空海さんは東寺を嵯峨天皇からもらわはって、「おい空海、これから東寺の寺、おまえ面倒見いよ」と。そやけど面倒見るの、空海さんが見られへんと。誰ぞ、仏壇の掃除したりとか、お花置いたりとか、お線香とかそんなんしてくれへんか言うて、当時の田中伊雅さんがそこへ出入りしはったとか。それからずっと1100年間いわゆる真言宗を中心に仏壇仏具を扱ってはるといふ企業でございます。また、これはご存じだと思いますけども、金剛組というところが、聖徳太子さんに頼まれて四天王寺を建てたというよな創業1400年の工務店があるということです。

京都における老舗の条件

京都の老舗の条件というの、少なくとも、江戸時代の創業と違うかなという事です。そのうち大体45軒が全部伝統産業系でございます。そこに書いてありますように、豊富な企業経営と技術のノウハウを持つということと、長年の信用と安定した顧客を持つ。特に長年の信用と安定した顧客というところで、これはご近所の長老から聞いた話なんですが、京都人というのは大丸の袋を持って高島屋へ行くときは、その袋はコインロッカーに置いていく。大丸の袋持って、高島屋なんか歩くっていうのは京都人の恥やというか、大丸さんに対しても高島屋さんに対して失礼に当たるというような話を聞きました。ということは、それなりに、みんな、その会社、その企業さんに対して信用してはるといふことかな、ということです。それと、新潟県中越地震、東日本大震災のときに、いろんな方から聞きました。あそこの問屋、うち取引あるんや。すぐ行けとかいって一番に駆けつけてくれたのは京都の取引先の企業やったという話も縷々聞いております。

お店として、500年、300年も続いてる、という話ですけども、世襲的に大体一族の方が継いでるんですが、いわゆる養子縁組、婿を取るという話ですね。後継ぎが女子ばかりだと、お店で一番よく働く、一番ええ男の子を養子に迎えて、その家を継いでいこうと、いふ話がある。中には男の子は「新

宅」として外に出してまで、婿養子を迎える。そういや、私の周りに、沢山、養子いやはるな。友人の白生地屋さんも、「あんた長男やのに、何でお店が別なんや」「妹が婿取りよって、わしは放り出されて、わし新宅してんのや」とか。そういうようなかたちがあるという話。

実はこの話を4年ほど前に京都府と一緒に上海へ行っときにしゃべったんです。そしたらあとで質問が出てきて、婿を取って女性がどうのこの、女性の人権蹂躪ではないのかって目三角にして怒られまして、日本はそんなことをしてるのか？いや、これは日本の例え話ですがなと、ちょっと海外の方にはこの制度がなかなか受け入れにくいという話を聞いております。

京都における伝統産業の背景

次に京都の伝統産業の歴史的な背景なんですけども、これはご存じのように、平安京の設立と関係があります。平安京ができたときに、朝廷の儀式とか政治に必要な道具を作る役所があった。かっこええこと言うてますけど、要は天皇さんとかお公家さん、自分の身の回りの衣食住のことでできなかったということで、大蔵省の中に織部司とか須恵の司とか紙屋院とか、要するに身の回りのものを作る役所があった。そこに勤めていた官吏（今でいえば国家公務員）が京都の伝統工芸の職人さんのルーツです。この職人さんのポリシーが今までずっと続いている、というのが京都の伝統産業の発端やということです。その話をする、西陣織の歴史は何年？という話を大学生に聞くと、西陣織というのは応仁の乱で、東軍と西軍がとかいうて、そして650何年ぐらいという話が出て来ますけど、「残念ですが、間違いです」と、言います。西陣織というのは秦氏という太秦映画村のところにある広隆寺のあそこの渡来人が織物を織る技術を持ってきて、教えはって、それがいわゆる平安京の織部司のもとになって、だから1300年ほどあんのやで、ってな話をしたら、へえって皆びっくりしてるという、それぐらい歴史的なものがあります。

それと伝統行事ですね。町衆の祭りということで、三大祭り。それからいろんな祭りがあるということです。特に一番新しい時代祭においても、時代祭の各装束、もう100年は経つので、ぼちぼち順番に装束を替えていかなあ

かん。私も時代祭の平安講社の役員してますけども、「おい、あれ、替えなあかんのやな。値段はるで。そやけど、昔とおんなじようにせなあかんのやろう。ほな、室町のあそこ行かなあかんのか?」と言いながら、伝統産業を守っていく。これも一つの手段やないかと思っております。

それと3番目、お寺さんです。西本願寺、東本願寺、知恩院さん、比叡山もあるということで、やっぱりそういう宗教行事とお寺さんの仏具関係が動くということ。その次が和のメッカということで、お茶、お花の宗家があるということも一つのところかと思っております。

意外と風土ということで、これは子どもたちに言うと、よく理解してくれるんです。京都の夏というのは、くそ暑いやろう。暑かったらどうすんのやと。戸全部はずしたら涼しいやん。戸はずしたらよそから丸見えやろう。そやからいわゆる網戸と違って、すだれを吊ったりする、それが御簾の文化とかそういうものになったんや。冬になったら今、エアコン効いててあったかいけど、そこで信楽焼か清水焼の火鉢で炭があったら手あぶってみ。何となくほっこりあったかいやろう。そういう寒い、暑いという季節を利用したもの、いわゆる生活文化っていうものが、伝統産業になったんやで、と話すと、見学の引率の先生のほうが喜んで帰ってはりますけども。

総合産地というかたち

その次に京都の伝統産業の特徴は、いわゆる総合産地というかたちです。例えば友禅染。いわゆる加賀友禅、東京友禅、名古屋友禅もあります。もともとのルーツは京友禅です。陶磁器も、仏壇も。よその都市でも同じような名前がある。何とか仏壇とか。京都の場合は京仏具、京仏壇とか京をつけております。違いを差別化しています。だけでも、そのルーツが全部京都にあるということです。かつて、この京都中心主義を主張したら、京都! 京都! とあまり威張るな、と叱られたことがあります。

特に友禅の場合ですと、宮崎友禅斎さん、隠居しようと思って、石川県の加賀の前田さんに呼ばれていった。だけど隠居せんとそこで教えた。それが加賀友禅やった。加賀のお殿さんが江戸の下屋敷に、「うちにええ職人います。ええもんできてるやろう」と言って、江戸の下屋敷にいっぱい広めた。

それ、江戸の市民が見て、うわ、すごい友禅あるな。これ、東京友禅の始まりです。それを見ていた尾張の大納言がその職人をヘッドハンティングして、「うちの尾張にも連れていきたいな」連れていったのが、名古屋友禅の起こりというルーツがあります。やっぱり京都がすべて中心やった。

ところが、ものづくりというのは本来地産地消で、そこに材料があって、そこで消費するのに、何で京都でもものづくりが発達したかということです。それは皆さん、ご存じだと思いますけど、平安時代、租庸調の税金ということで、都にいい物が一番集まってきたということです。ここに刃物の話を例に挙げます。これは、「京都の刃物が日本中の刃物の元祖なんや。他産地の刃物は江戸時代に参勤交代のときに広まっものや」という刃物組合の元理事長の言い方を、私も受け売りしてますけども。

平安時代に租庸調ということで、鳥根のほうから良い砂鉄が来ていた。丹波からいい炭があった。鉄を作るいい条件が全部揃っていた。そこへ持ってきて、愛宕山の下に鳴滝砥石といういい砥石が出てきた。それと能の演目に「小鍛冶」というのがあります。三条宗近が刀を打とうと思ったけど、ええ刀打てへん。そしたら夢にお告げが現れて、そこにお狐さんが出てきて、手伝いしましょうかといって一緒にええ刀ができたという。だけどその能のストーリーも平安時代。ということは、平安時代に既に三条宗近のいたところとは、今のウェスティン都ホテル、ふれあい館の近所ですけども、そこに相槌稲荷というお稲荷さんもあるぐらい、既にものづくり、刀作っていたというものの一つの証です。

それからもう一つは江戸時代の参勤交代の下りものということで、関西のいわゆる「ええもの」が関東へ行く。下り酒ということで、江戸の方は灘、伏見の酒を待ってはったということです。京指物が江戸へ下って行って、江戸指物になった。江戸指しもんになったときに、「江戸は武士の文化や。木のさんが細かったらあかん」と、いろいろ工夫しはった。今でも指し物の展示会へ行くと、これ、京もんやな、これは関東もんやないうて、見分けがつく。繊細で細いなと思うたら、やっぱり公家物で京もんかいな、てな話をしたら、この前、新しいホテルとか旅館が海外からのお客さんを対象に建設される時に、そこに置く調度品で、「京ものを置くべきか、江戸ものを置くべ

きかとか」いうて、ふれあい館へ来はりました。

京都のものづくりは分業体制

それと京都のものづくりは実は分業体制なんですね。さっきの友禅染のことを言いました。加賀友禅では、ほとんど1人の方で、よくいて2人ぐらい。東京友禅になると、一気通貫で1人の方が全部、糸目糊置から染色まで全部やられるということ。京都では、全て分業です。例えば、レジュメの分業体制の一例京友禅だけでも、11も工程がある。それを全部、伝統工芸士さんが受け持つ分業になってる。これ、この前アメリカの方に説明したら、よくそんなものできるなど。誰かが手抜いたらどうなるんですか、という話が返ってきました。京都のものづくりの職人さんは一切手抜きはしません。というのは、次の石工の矜持ですけども、「雑な仕事をすれば、次に来た職人はそれを見てつい雑な仕事する。だからいい仕事をしておきたい」と、石積の職人は言うという。これは京都市立芸大の鷺田清一学長が講演されたときの話です。この話を私も聞いて、そやそや、その通りやと思って、ちょっと引用させてもらってるんです。わかりやすく説明するには、例えば1番の人がちょっと1割手抜いたれ。次の人も1割手抜いたれ、次の人、1割手抜いたらどうなるのやということで、絶対手抜きはしないというのが、京都のものづくりの職人さんの魂やということを言うてるんです。

伝統産業の定義

これからまた釈迦に説法ですけども、伝統産業の定義ということをお話させていただきます。この話の中から今の伝統産業の状況が見えてくるのではないかと、思っております。これは昭和49年5月に施行されております。まず初めに、主として日常生活の中で使われるものということで、普段使いということです。これがお茶わんであったり、お箸であったりとか、これが最近、美術工芸品になってしまっているのと違うやろうか？と、思っています。伝統工芸品は、毎日手に取ってさわる、使うものやと。ところがガラスの向こうとか、ケースに入れているものになっているのと違うやろうかと。特に女性が来はったときに言っているんですが「たんすの中に着物をずっと入

れっぱなしとちゃいまっか。置き物にしたらあきまへんで。毎日着るお着物にしておくれやす」なんていう駄洒落みたいな話をしてるんです。これは人間国宝の誰々、何とかが作らはった着物、友禅で、どここのところで150万で買ってきたんやとか言うて、たんすに飾ってはる、置いてはる。それではあかんと違うか。だけどそれが、今の伝統工芸品の主流を占めてんのと違うやろうか？と思っております。

それと2番目は、製造工程の主要部分が手作業であるということ。これは大事な提言で、ちょっとグレーゾーンもあるのですが。じゃあ、西陣織は力織機で織ってはる。あれどうなんのやな。あれ、伝統工芸品と違うのかいな？あれはいわゆるちょっと助けてもらてはんのやと。本来手織で織るのやけどもそれをモーターでやってんのやと。決して1人の職人さんが2台も3台も持てないやろう。1台の織機で、ガシャガシャと織ったら、ちょっと止まってよ糸を入れて、またガシャコンガシャコンいうたらちょっとまた止めて、箔引いたり。手機の動きをモーターで助けてもらっているだけや、というような解釈をしています。

それと伝統的な技術技法が100年前から続いていること。これが大事なことで、100年前から同じ材料、同じ道具、同じ方法ということです。例えば100年前の刷毛が、今、あらへんがな。用具がなくなっているがな。これ、どないすんのやな、ということが問題になっています。特に表具の組合行くと、糊はなんぼでも自分とこで作れるけど、刷毛がない。それから用具がない。その次に材料ですね。伝統的に使用された原材料。特に天然材料です。本来は国産の漆、国産の絹。でも、9割方が海外の絹になっています。だけど同等製品やったらええと、言っていますが、ここも悩ましいところでございます。特に伝統工芸品は材料もオール国産でやってんのか？ってな話も時たま聞きます。

次に、一定の地域で産地を作るということです。おおむね一定の地域で、会社が10軒以上あるか、30人以上の職人さんがいて都道府県を通じて、経済産業省へ届け出ると、伝統工芸品のこのマークが認定されるということです。

全国にある230の伝統工芸品

これ、届け出ても必ずしも通るわけではないんですね。やっぱり審議会で審議されるということです。いま、全国に伝統的工芸品が230品目あるんです。この中で、どこが一番多いかというたら、やっぱり京都が17品目で一番多いんです。ちょっと前までは東京が16品目で2番目やったんですけども。

実は平成29年12月に新しい五つの伝統工芸品が入ってきたんです。その五つの中に江戸無地染めといって、いわゆる無地染め、浸染（しんぜん）です。これが伝統工芸品として入ってきた。江戸紫という紫色とか江戸赤染とかで、東京は17になったんです。そのときに一緒に入ったのが、奥会津の、からむし織といって、麻の原料だけでなく、自分とこで織物にしようということで、まさしく地産地消をやっておられるのです。それから知多半島にある三州の鬼瓦ですね。鬼瓦も入ってきた。それから越中の福岡の菅笠。それともう一つが千葉県のもので、いわゆる職人さんが使う鑿、鉋、ヤットコなどの工具類も伝統工芸品に入ってきました。

ちょっと話、戻します。伝統産業の話を小学生にするとき、「どこが一番多いとか少ないか」とクイズをしていたら、北海道というのが時たま出てくるんですね。北海道は3年前やっと伝産品が二つになったんです。いわゆる北海道のアイヌの方の彫り物、それからいわゆるオヒョウという木の皮をはいだ織物。

昔からあったのですが、文献などの記録として裏付けが北海道開拓の歴史と共に始まったので、伝産品の定義の100年という項目によりやく該当したのです。

逆に多いのは、沖縄県です。沖縄というのは、小さな島、久米島紬やとか、ずっと昔からやっていたということです。

奈良県には、国登録の伝産品が実は二つしかないんです。お習字の筆とそれからお茶のときの茶筌と。これを聞かれた方は「おまえ、何言うてんの。近鉄の奈良駅前に古梅園いうて、習字のときの墨。あれ、奈良時代からやってはるやんか。あれ古い古いやないかいな。あれ何で伝統工芸品ちゃうねん」といわれます。これは国登録の伝産品の条件の一番最後に言いましたい

わゆる組合としての登録条件の企業の数に、問題があるのです。この場合は奈良県なり奈良市が独自で国に準ずる扱いをする、ということで地域の伝産品として認定してるということです。そういうわけで京都市には、今、国認定の伝統工芸品が17品目しかないけども、京都市には市独自に認定した伝産品を含めれば実は74品目ある。ということになってくるわけなんです。

伝統産業の振興に関する法律

ある県に国認定伝統工芸品が16もあるんです。何県かという、新潟県なんです。何で新潟県に16もあるのかといえば、実は昭和49年、この法律ができたとき、通産省に、地元の田中角栄さんが通産大臣をやっておられたとか。今度、国で伝統産業の振興に関する法律ができると。この法律ができたら利点が二つある、と言われたんです。

一つ目は、後継者育成事業です。伝統工芸品を作る伝統工芸士になろうと思ったら、現在では「その道、12年」という制約があります。かつては20年やったんですね。就労期間が短くなっても、今日や明日に伝統工芸士になれるものではない。少なくとも勉強せなあかんという。そのときにいわゆるこの認証マークをいただいている伝統工芸品の組合は、後継者育成のために職業訓練学校的な制度を作ってください。そのときに本人は3分の1、都道府県は3分の1、国は3分の1お金出します。おおむね2年間ぐらいは勉強できるような制度を作るということが認定の条件になっています。

それと二つ目は、銀座の三越百貨店の展示会に出したい。名古屋の松坂屋への展示会に出したいな。そういうとき、伝統工芸品の組合とし申請していくと、後継者事業と同じように都道府県、国から補助金が出るということです。今、そういう制度を利用して、日本国内だけではなく、「クールジャパン」という経産省の合言葉のもとで、パリとかミラノとかロンドンとかニューヨーク、フランクフルトへ「日本のよきもの」を出展しているいう。今、Googleを開けると、メイドインジャパンということで、日本の伝統工芸品がたくさん掲載されています。「うわ、こんなにきてるや」と海外の方々も、皆注目しておられるということです。これも伝統産業振興の一つのパターンかと思っております。

京都市による伝統産業の定義

まずは白須先生もご存知のように、昭和49年4月に京都市伝統産業課という課が設置されたけども、40年間伝統産業課と名前を一度も変えてないのはここだけらしいですね。よそは福祉何とか課とか、子育て何とか課とか名前が変わってる。ずっと40年間名前を変えてないという、「全国でも珍しい組織」と伝統産業課の野口課長がいつも自慢してはります。ところが京都の伝統産業って、いったい何や？京もんって何や？この定義が、実はなかったということなんです。

そこで平成17年に京都市伝統産業活性化推進条例において、京都の伝統工芸品はこれだといって、決めたときに、いわゆる技術技法的なことは、おおよそ国に準ずること。ただし、伝産品の条件の5番目の組合を作る企業の数とか職人の数を除きます。

二つ目は、日本の伝統的な文化及び生活様式に結びついたもの。要するに今の日本の伝統文化、特に文化庁が来はりましたんで、そこら文化庁がもっとバックアップしてくれはったら、これがもっとクローズアップされるかなと思ってんですけど。

その次に、京都市内で企画され、かつその主要な工程が行われていることです。これをもって京都市の伝統工芸品として認定することになりました。その当時、国では17品目あった。京都府で認定してるものが12品目あった。それから京都市の手仕事工芸で33品目。それからもろもろということで、現在、74品目入っているわけなんです。

ところが京都市内で企画され、その主要な工程が京都市内にあるという条件で、認定から外れた話があります。寺町三条に「みすや針」といって、和裁のお針屋さんがあるんです。みすや針さんを、2年か3年前に京都の伝統工芸品に入らへんかと言うて、伝産課の職員が調査に出向きました。ところが社長いわくは、「3年前までは山科で針打ってたんやけど、山科でも針打ってくれへんさかいに、今、地方で針打ってます。地方で作ったもんを京ものというのはちょっと言いづろうて、もう結構ですわ」という、ある意味奇抜な人がいはるなということと思っています。

食品と伝統工芸品

次に、18年前の見直しの時に、菊乃井の村田さんが来られて、「和食」の登録ではなしに、あの頃は「京料理」として、なぜ伝統産業品に入れてくれへんのかというお話があった。末富の山口さんも同じように、京菓子を何で伝統工芸品と認めてくれへんのか。京菓子いうても、いわゆるお茶の席に出すお菓子や。桜餅いっても、べたっとしたあの桜餅と違う。御室の桜というお菓子の名前ついたお茶席で使うお菓子や。と、いろいろ説明をされ、そういうお菓子を何で伝統産業として認めてくれへんのかという話があった。

ところが、当時の行政の組織割では、食品・飲食物は農水省の管轄で、伝統工芸品は経産省の管轄。なじまないのでは、といった意見が出てきました。その時、元京都大学総長の西島安則先生が「いけず言わんと、入りたい人は入れたげたら」の鶴の一声で「京料理」と「京菓子」が参画されることになりました。

その時に、食品として「京漬物」も入りました。ただし、たくわんやとかキュウちゃん漬けやではありません。「京漬物というたら三つしかない。すぐきとしば漬けと千枚漬けや。その三つに関しては、自分とこの組合の傘下には、これは京ものとして、伝統工芸品的な扱いするように」と京漬物組合の理事長が、おっしゃりました。だから全国的に見て、食品が伝統工芸品の中に入っているのは恐らく京都だけだと思います。よその産地へ行くと、お菓子はお菓子で伝統工芸品と別の扱いしています。これ京都の伝統工芸品の面白いところかなと思っております。

1軒だけになった足袋を作る職人さん

それと、舞妓さんが出てきたんですけども、実は今日、ショッキングな話がありました。京都の舞妓さんで「京たび」を履いている舞妓さんはだれもいないということが分かったのです。

実はこの足袋を作る職人さん、植田さんって、7年前に1軒だけになったお店です。舞妓、芸妓さんの足袋は誂えの足袋なんです。自分に合った足袋を注文するのですが、今、誰も注文していないとか。植田さんに尋ねると、「誰もいいひん。たまに、2、3人の芸妓さんから、注文が来るけれども、

商売にならへん。もう、廃業しようと思っている」。

かんざしもしかりですね。これ、金竹堂さんというて、花見小路の西ちょっと行ったところに1軒だけです。職人さん3人しかいまへん。だけど、このつまみ細工といった加工をチャレンジしているお店もあるのですが、花街のお母さんに聞くと、「やっぱり金竹堂さんのやつでないとかかんわ。この前、店出しするときに、よそのお店の商品を使っただけ、やっぱりあかん」とのこと。ほっといたらかんざし、それから舞妓さんの傘も風前の灯。つげのくしも、十三屋さんだけ。足袋がもうじきなくなってしまう。もし、花街の小道具が無くなってしまったら。これは困るぞと、いうことで伝統産業課、ふれあい館が何とか活路とか使い道を見いだせないかと汗をかいているのが実情でございます。

京都市の伝統産業に関する取り組み

そして次、京都市の取り組みに話はいきます。最近の伝統産業の活性化推進条例の中で取り組んでいる中に、「伝統産業に関する創造的活動に対する支援」ということで、特に京ものの海外市場開拓事業です。これは京都 Contemporary とか京都 Connection とかいうて、1月、2月にパリのほうへ、商工会議所中心に若い方が行かれます。そういう企画を、どんどんやってるのはいえことやなと思っております。

それと、「いまのわ」「京もののユースコンペ」といった、若い方向けにいろんなコンペティションやってもものづくりに取組んでいます。それもコラボでもいい、いわゆる伝統と革新やないけども、必ずしも、かちんかちんの伝統工芸品と違う、少々型破りしても構へんがな、というようなかたちでいろんな企画を行って、商品ができています。

それから2番目が、伝統産業に関する教育、学習の場における取り組みで、今日配りました『わたしたちの伝統産業』です。これは毎年、京都市内の小学校に配布しています。

ところが、十分に活用されていないのが現状です。中には、現場の先生方で『わたしたちの伝統産業』の存在を知らない方がいらっしゃるとか。京都市内にはまだ、100近くの小学校がありますが、年間を通して「ふれあい館」

へ見学に来られるのは 20 校程度です。

この中の写真の撮った 74 品目は全部ふれあい館で撮った写真でございます。これ全部、実は著作権は教育委員会が持っておられたのです。私たちは自由に使えないということで、この前、伝産課さんと一緒になって、ふれあい館に置いてあるものを中心に 74 品目、全部、デジタルで撮り直しております。もし例えば業界の方々が、ここの写真をデジタルで使いたいといえ、使ってもらっても結構です。

それともう一つは、京の匠ふれあい事業ということで、いわゆる職人さんを小学校にも派遣しますし、もう一つ今日お配りしたこの水色ですけども、職人さんの実演いかがですかということで、これも 2 年ほど前から取り組んでいる事業です。特に京都は学会が多いんですけども、宝ヶ池で国際学会を開催する。そしたら昼休みの間のときに、職人さんの実演を見学される。そして、京都に来たら、「こんなおもしろいものを見た」ということでインスタグラムなどで広まります。「職人さん、よければ派遣しますよ」ということです。

次に述べるのは、世間からは失敗するやろうと言われてた「みやび」というネットショップです。伝統工芸品をインターネットで販売する企画ですが、石の上にも 3 年過ぎて、5 年になりました。やっと動きかけております。特に新聞でつげ櫛が載ると、それを見た読者がネットで調べると「みやび」で、つげ櫛があることが分からはる。次の週、次から次へとつげ櫛の注文が入ってくる。山本さんという若い金属工芸の職人と魔鏡の映像が、でテレビに映ると、ネット検索で「みやび」に魔鏡の注文が入ってくる。この様なメディアに露出すると、ふれあい館が運営しているネットショップ「みやび」に注文が舞い込んでくる。これはありがたいことやなと思っております。

それから裏側に「記念品に京もの」といった宣伝です。実はこれ、いわゆる「京都らしい開催支援制度」で、MICE のほうから展示会とか何かの企画をするときと、上限 30 万円の補助金が出るということです。例えばバッグを学会で使うので 500 個、作りたいという。その 500 個作ったときのいわゆる上限 30 万円ぐらいまで、補助金が出るといった制度がございます。非常にこの頃、それが好評になってます。一番手軽なことでしたら、小学校の先

生が同窓会する時に、名刺入れ作る企画をされる。「名刺入れに名前入れてくれへんか。例えば何とか小学校同窓会と」。「わかりました。50個からやらせていただきます」と。

工房での見学や体験

その次が、工房コンシエルジュということで、伝統産業の工房に見学に行きたいという方は非常に多いんです。ところが職人さんの工房は「そんな来てもらったら困る。仕事の手取られる。じゃまや、嫌」という。お互い相反する条件のもとで、何とかこれをつなげへんかなということで、3年前から取り組みました。伝産課のほうの特別予算をいただきました。

特にインバウンドのはしりだったので、「海外の方に工房に行ってもらいたい」といった企画を立ち上げました。可能性のある工房を20ほど探し出しまして、リストアップして、「他に公開できる工房はありませんか」ということで、今、やりかけております。これが今、40ほどということです。この企画も京都新聞のほうで3回ほど取り上げていただきました。

それ見た彫金やっている工房から「うちの工房も見学に来てもうても構へんで」ということで、逆にお電話をいただいて、ほな、行かせていただいて、じゃあ派遣登録しますということ。

また、海外の方のために、通訳は？英語はどうするの？そのときに京都市内で通訳ができるという「ビジターズホスト」という制度を京都市が2年前から作ってます。そこのビジターズホストにガイドさんとしてセットにし、京都市内の工房へ行ってくださいね。その代わり1時間5000円ですよとか、全部そこでやっていただくということをやっております。

単なる体験とか見学ではなく、職人さんの横でじっくりと、職人さんの手わざ見ていただく。日本人の方よりも特に海外の方のほうが真剣ですね。例えば、陶器の絵つけの職人さんの工房で、「わー、ようそんなんでできるな」とか。それでは、「一つ作品作りませんか」というと、ものすごい喜んでおられる。ただし、そのときのお値段の設定がちょっと安すぎて、もうちょっと値上げしたいねということです。

ふれあい館がこれをやりだすと、海外向けの京都のタウン雑誌を出してる

企業も、うちもやろうかということで、よその業者の方もやりかけてはるということです。東京に本社のある海外旅行専門のツアーあたりから毎週3、4件電話が入ってきます。陶器のどこどこ行きたいのでよろしくお願いします。中には今日の明日のという話もあります。え？今日の明日？行けるかな。こっちが電話してあげて、OK みたいです。あとは交渉してください。といった話をさせてもらったりしています。

その次が伝統技術の継承とか後継者育成です。特に伝統産業従事者の後継者育成の奨学金で、先ほど3分の1ずつ補助金が出ますと言ったそれ以外に、もう事業終わってしまいましたけども、OJT 研修ということで月10万円、初任給という形で、工房にお金を渡してるという制度。今、これ確か、かたちが変わって ASTEM さんのほうに移管して事業になってるかと思います。それと先ほど言いました「未来の名匠」といった懸賞制度ですね。

和装振興

それぞれの伝統産業の日。それから和装振興ということでユネスコの文化遺産登録を目指しています。

今、街の中で、レンタルの着物を着た海外の方が大勢、いらっしゃいます。これについては賛否両論があります。

去年の秋時分にベトナムのほうから政府の高官が見学に来られ、ふれあい館で意見交換をしました。伝統産業、日本と京都の状況をしゃべったときに、「今、街中で着物姿の女性を見かけますが、あの着物は伝統工芸品ですか」といった質問が出てきました。「あれは違います」とはっきり言うとききました。いわゆる京都の伝統工芸品で、着物というのは絹であったり、綿であったり、麻であったりという天然材料を使ったもので、京友禅という確立された技術、もしくは西陣織という伝統の技法に基づいたものです。インクジェット加工や、ポリエステル素材のぺらぺらの薄い着物ではありません。それを伝統工芸品と言われたら、ちょっと片腹痛いです。あれは違います、いや実は材料はポリエステルです。という話をしたら、そのベトナムの高官は「ベトナムの民族衣装のアオザイは絶対ポリエステルでは作りません。あれは全部シルクでやらなければならない。」と発言されました。やっぱり素

材を大事にしてはるんやな、と一つ逆に勉強したような次第でございます。

ということで、着物も何とかせなあかんということ。それとインバウンド事業ということでMICEの話をしました。ビジターズホスト研修ということで、その研修の中身も実は伝統文化、建物、伝統工芸品と食品、その四つのコースが入っていて、ガイドさんだろうと思ったら、その四つを取らなあかん。大変やなと思いつつ、伝統産業のほうはうちのふれあい館のほうでカリキュラムを作らせてもろてというのが実情でございます。

「作り手」と「使い手」

最後にこの話をちょっとさせていただきます。いわゆる伝統工芸品といったら、作り手が50、それを使う人が50で、初めて「ものづくり」になるということです。特に仏壇ですけども、こちらがふれあい館に置いてある仏壇。なんぼぐらいと若林さんに聞くと、「大体4000万円ぐらいちゃうかな、この仏壇。サミット仏壇（最高級の仏壇）で、平成23年から24年まで、2年間かけて作ってもろたという。6人の職人さんが作ったやつ。こんなもん売れまへん。マンションでこんな置けまへん」。今、仏具組合が「いのり」というブランドで小さなタイプの仏壇を開発しています。作っている職人さんは伝統工芸士です。大体20万円か30万円ぐらいします。だけど、これがこの頃よく売れてるという話も聞きます。

ここにありますのは開化堂さんの茶筒です。もうこれは皆さん、よう知ってはります。それから、これが白井さんとこの「おりん」ですね。白井社長はこの「おりん」売れへんさかいにいうて、ポケットにいつも入れて、チンチン、会議あるたびに鳴らしてはったけど、とうとうその音がフランス人の耳に止まって、自転車のベルに変わりました。自転車のベルに加工したのは京都市の産技研です。今、フランスへ輸出してはるということで、伝統工芸品の一つの化け方です。

それからこれ、「京こま」というものです。こまなんですけども、これに巻いてあるのは、全部西陣織の帯の生地なんです。普通の竹の芯棒に帯のはぎれを巻いたもの。雀休（じゃっきゅう）さんという二条城の近所のこま屋さんが昭和30年ぐらいまで作っておられたのですが、廃業されました。そ

のお孫さんが、「わし、もう一度、復活するわ」ということで、工房を復活された。すると、いろんなところでメディアが注目したり。それから簡単に体験できるんですね。だから小学校とかそういうところにも出向いたりとかで、今、非常に脚光を浴びてるということでございます。それと、例えば一澤さんの帆布ですね。このかばんも伝統工芸品になってるし、それから食品の話もしました。

商いの方と作り手の方

それといろんな展示会をするときに、「ふれあい館行ったらいろんなもんあるさかいに」といって借りに来られます。実はふれあい館の収蔵品には大体2万点ぐらいあります。これは平成10年ぐらいから、職人さんに京都市がお金出して、いろんなもの作ってもらった。着物とか漆器とか陶器とかが中心です。逆にふれあい館で、業界別の展示会などをする時に、各工房へ「何か出してください」と呼びかけても、「うち在庫なんてあらへんで。うちは問屋から頼まれて作って、それで売ってしもうたら、おしまいや」。そうか、伝統工芸品のストック、在庫って工房にはないというに気が付いたのです。

それと昔はパトロンがいて、「伝統工芸品いうのはパトロンが買うてくれはったけども、パトロンがいんようになってもうたし、あかんわ」というような話。それと高島屋の特選会もこの頃、ブームになってる話も聞きます。高価な良いもの。ほんまものが手に入る、という話をしたら、そこに買いに来てはる人の3分の1は、中国の方らしいです。お金は向こうのほうが持つてはるのかなと思う。

それと先ほどポリエステルに着物の話をしました。やっぱりポリエステルニュー着物が市場に受け入れられなかった。何でかという、やっぱり材料の話になるのではないかと思います。

次に、分業体制が崩壊したらどうなるのか？ということ。職人さんの道具がなくなったらどうなるのか？ということです。また、なんば国の補助金制度があっても、やっぱり徒弟制度というのは過去のもんなんやろうかね？という一つの悩ましい問題です。

今、日本酒が非常にブームです。要するに小さい蔵で何代かの社長、特に松井酒造さんとか佐々木酒造さんとかそういう方が非常に頑張ってはるということです。ということは同じように、今、若手の伝統工芸品を作ってはる若手の職人さんが、いろんなところで、この頃表に出てはるということです。メディアにも出てきたりとか、海外に行ったりとかいうことと、一昨年は提灯の小嶋さんがアブダビへ行って、提灯を張ってきはりました。とにかく、今、若手の職人さんが海外のいろんなところに行ってはるというのが実情でございます。ということで、一応雑駁な話、終わらせていただきます。

質疑応答

司会者 八田さん、どうもありがとうございました。京都だけではなくて、日本の伝統産業の状況、また京都のその中の伝統産業、そしてふれあい館というのが、今、どういう活動をしてるかというお話をしていただきました。今、お話を聞いていただいたらわかるように、八田さん、非常に伝統産業にお詳しいので、どういったことでも結構ですし、ご質問がある方は、まず質問していただいて、そのあとせっかくいろんな分野の方がおられますので、意見交換も含めて、話を活発にしていけたらと思います。せっかく学生の方が、今、分業のこともされてるということなので、今の話聞いて、質問とかあったらしていただいて、その辺から話を広げていきたいと思いますので、よろしくお願いします。

質問者1 私は今、経営学部卒業論文で伝統産業について主に京扇子について研究させてもらっていて、今日はちょっと参加してみないかということで参加させていただきました。質問とか、あんまりわからないんですけども、感想といいますか、最後のほうに分業体制が崩壊すればっていうことなんですけど、それについて私が京扇子企業にお話を聞いていく中でも、外に注文する分業制ではなくて、企業の中で自社で生産していく内製化みたいなものが進んでいるのではないかなというのを考えていたので、分業制が崩壊してしまうっていう可能性も考えてらっしゃるのかなというのを感じました。

八田館長 京扇子の場合は、工房の中でいわゆる職人さんを抱えてやってお

らえる一気通貫、材料から仕上げまで、絵つけも自社工房の中でやる。このほうが、扇子とかうちわは多いですね。外へ出さないというかたち。だけど、友禅とか西陣とか、清水、焼き物になると、完全にろくろ成形、絵つけとか、絵つけも上絵つけ、下絵つけと、ぱちっと分かれてしまうところもあるという。

質問者 1 ありがとうございます。

質問者 2 実は京扇子の、江戸時代からやってるお扇子屋なんで、工房の中で分業はまだしっかりやっております。逆に特殊なものというのは、骨屋さんは骨屋さんとか、歌舞伎の役者さんが使われるものとか、いろんなできない特殊なものを、うち、させていただいてるんですが、それぞれの職の方を守っていかなきゃいけないので、みんな、今、何でも自分とこでやっている。内向きになってますが、各代々、守ってきてもらってる職人さんをいかに守っていくかということをしていかないと、今の分業の体制が自分のところだけに限られてきて、ものを作れなくなるんですね。だからそれを守らないといけないということで、いろんなアイデアを出して、骨屋さんから、紙屋さん、箔屋さん、色つけ屋さん、全部それをうちは一生懸命守ってるほうです。全部内向きになって、何でも自分とこでやって、ちっちゃくなってしまいますので、昔からの分業制度、それから竹の材料、竹屋さん、切る職人さんから、全部すべてを守っていかないと、ちっちゃくなっていくと思うんですね。ですから、これから分業のことも守っていかないといけないと思って、論文書かれるときは、また相談していただいて。

1570年には帝から命を受けて、深草の竹で、真竹で、うちわ作りをして、それを差配する立場やったので、それを全体的に伸ばしてきて、1624年に差配だけではだめなのということだったんですが、そのところがいつも歴史からずっと抜けてる部分が、ふれあい館さんで、いつも気になっていた。この機会を、正しい歴史を伝えてもらいたいなと。ほんと、芸妓さん舞妓さんのうちわになってということですが、それまでの歴史のほうが長いんです。芸妓さん舞妓さんは明治からなんです。でするので、そここのところをちょっと伝えていただきたいと。

八田館長 わかりました。

質問者2 確かにいつも抜けてるなっていうのあったんです。あんまりう言わなかったんですけど、せっかくですので、今日はお伝えしたいなと思って。

八田館長 ふれあい館の常設展示を2年後には改装全部しますので、今みたいな置き方と違って、いろんな歴史的なものを、縦、横マトリックスのところで変えてますので、そのときにはちゃんと歴史的な背景とか、全部そういう資料とかも展示するようにしますので。

質問者2 詳しく直接言うていただいたら。

八田館長 はい、わかりました。

質問者2 よろしく願いいたします。

司会者 そうしましたら、どうでしょうか、皆さん方。私も実はいろいろ質問したいことがありますけれども、せっかくの機会ですし。私はいつでも話できる立場でありますので、何かございませんでしょうか。

質問者3 経営学部の鉄塚です。今日は非常に興味深く勉強になりました。ありがとうございます。一点お伺いしたいのが、最後のスライドで、商いと作り手というので、対立っていうのは、地場産業とかでは必ず問屋とか、そういった産地の中で中核的になるような作り手にプラスの流通にかかわる問屋とか悉皆屋が重要になってくるかと思うんですが、京都の場合は、僕もあまりまだ勉強は進んでないんですけど、入ってみると、着物とか織物というのは全国に対して、中心的な問屋的な機能があるんじゃないかなと思って。

例えば私が昔、大島の大島紬。大島行ったときも、そこの取引先は京都で、そこでの今、買い取りがかなり少なくなって、だから生産が縮小してるというお話もあって。そうすると京都の伝統産業というのは、一つは京都というところが地盤になってるんですけど、そこでの商社は当然地元の京都だけでなく、全国の伝統産業というものも見ていってるのかなと思うんです。そのようなほかの産地と京都の伝統産業というのをネットワークするような商社的な機能っていうのは、京都の場所にあるのかなという。

八田館長 あります。はっきり言って、あったという言い方にしたほうがいいかもしれません。例えば紬でも、廣田紬さんのような、今、言われた大島紬から結城紬から、いわゆる全国のありとあらゆる紬を全部扱って、京都の

室町というところで、場合によっては東京まで展示会出しに行ったりとか、京都の廣田はんとこの紬いうのは、さすがええのん全部集めはるな、というそういう状況でした。焼き物でも、いわゆる清水の商社の中にも、京焼だけと違って九谷から有田まで全部扱えるそういう問屋、商社の方もいらっしゃいましたと言うたらええのかな。当然商社ですから、在庫とかいろんな問題もあろうかと思いますが。

質問者3 研究とかそういう分野になるかもしれないんですけど、あったところ、なぜ縮小の傾向に京都にいながら向かっていったのかというところですが、例えば東京にそういう商社機能とか商社が日本で一番集まっていて、そういうとこに役割がシフトして行って、京都はそこでどんどんギリ貧になっていったのか。それとも、また違うのでしょうか。

八田館長 今、言われたギリ貧というか産地の疲弊ということですね。それと全国の産地が、伝統産業自身がもう疲弊していたということと、それからいわゆる和ものを中心に動いてたということで、和が今、だんだん右肩下がりになってきたということです。例えば焼き物ですと、洋食器のところに清水焼をアレンジしてみる。有田とか伊万里とかという産地も動き出す。若い方でごそごそ伝統産業展へ出かけていきます。そうなったらそこで、いわゆる産地の枠を超えるということ、いわゆるコラボしようやという若い方の動きが出てます。

質問者4 今日はどうもありがとうございました。わりと伝統産業の話すると、最後ちょっとしんどいイメージになってしまうことが多いと思うんです。大変僣越なんですけど、私、経済学部で伝統産業論という授業を担当しています。たくさんの学生が取っています。もう5、6年やってるんですけど、200人から、大体一番少ない年でも150人前後います。関心は結構あるんですよ。京都だから京都に来て、そういう授業をっていうのは、すごく関心をもってくれるんですけど、最初はちんぷんかんぷんのように。だんだんいろんな、前半は友禅とかビデオとか使って教えて、後半いろんな、職人さん支援の話とか、産技研の話とかもあるんですけど。大体最後まで若手の方々の話もしてまとめていくんですけど。最後になったら結構関心があるんですけど、いつも最後のアンケートで、伝統産業ふれあい館だけじゃないん

ですけど、西陣織会館とかも前半教えたところ辺をミニレポートなり何なりで、学生140～150人の3分の1は伝統ふれあい館に行っているんです。

若い人にも関心はすごくあっても、必ず最後のアンケートには、若者に対して向いてないっていうのがすごく出てきて。ふれあい館に行けばと言われて、授業でそうやってレポート書くから、行けば行ってすごいよかったって書くんですね。だからその回路が、大体、京ものも深いので、西本願寺とかあそこ、お寺も年取ってきたら、必要やってみんな思うから、伝統産業もそういうイメージでやってはるんかなとか思ったりして。学生にしたら若い人にも何か発信してほしいっていうその埋め。埋めていかないことには、年取ったらお寺と一緒にっていうのはちょっとあれなので、私自身も授業することで、それをきっかけになればいいなと思って毎年やってるんですけど。若い女性の方向けに商品とかはやってるって書いてらっしゃいますけど、若い人って多分、30代ぐらいにならないと買えない商品ばかりですし、何かそういう若い人への発信、トリップアドバイザーでも有名になられた若い方を使われるとか。その辺、若い世代向けに何か考えてらっしゃることがあったら教えていただけますか。

八田館長 今、ここに作り手50、使い手50という勝手な数式を作ってるんですけど、一昔は、作り手100で、そのまま100でよかったと思うんですね。伝統工芸品、わしがこんなええもん作ってるのや。何で売れへんのや。問屋が悪いのや。売り方下手なだけやと。今や、そのような状況ではなく、作り手50で、それを若い方がどう使ってくれるか、どう使うかという消費者ニーズというか。有り体のことですけど、それが今、全然できてなかったというのは、伝統産業の業界やと思うんです。特にそれ反省して。実はこのみやびというのも、これ作ったんは、これも30～40代の女性をターゲットに商品のラインアップをしたんです。今、言われるともう少し学生さん向きでもいける、ちょっとランク下げるかなということもいるかな。

質問者4 難しいとこですよ。

八田館長 ということも思っております。

質問者4 大学生向けに何かそういうなんとかも、また発信していただける機会が、商品だけでなく、そういうふれあい館でもしていただけたらと

思ってます。

八田館長 京都の大学でしたらウェルカムですというか、立命館大学映像学部の研究室が、学生に映像を撮らしたい、伝統産業の映像を撮りたいと。ほな、うち、74 品目あるさかい、74 の映像全部あらへんさかい、撮ってやという話で、今年は和ろうそくと、それから真田紐かな。うちの常設展示で流せるように、その映像を撮ってくれと。3 分ぐらいで伝統産業のエッセンスを紹介してくれという話で、映像学部の 3 回生それぞれ 5 人ずつ 10 人で取り組んでくれました。そのとき学生さんはこんな奥が深いって知らなかったという。だから意外とまあある意味、伝統産業業界のアピールが足らんというか、露出する機会がなかったんかなという。もっとだから、やっとメディアに出たりとか、何かいろんなことが出るとということで、やっていくのがふれあい館の一つのミッションと違うかなあ、と思っています。

このアナスタシアの扇子は確か 1500 円かです。このストールも、確かそんな高いものではありません。これ確か映画館のところで映画始まる前にちょっとコマーシャルが出ますわね。それを京都伝統産業ふれあい館いうて、30 秒だけこれ出させてもらって作ったときのスチール使ってるんです。そんな話もきだしたのは、ここ 2、3 年ですね。やっと伝統産業の業界にも若い方用に光が当たってきた。だけどそこで守破離やないけども、基本の伝統産業はこんなもんやと守りだけは忘れんと、すっとんきょうなけったいなとこ飛んではいかんようにするのだけはちょっと一つ。

例えば今、ポリエステルの 3000 円のレンタルの着物が、あれが伝統産業やと言われんようにはしたいなとは個人的に思ってます。中には、いや、あれがええのやんかいな。あれがこれから着物着る人の人口を増やすためにあれはあれでええのやというご意見もあろうかと思いますが。あれ、日本の方が着てはったらええけど、海外の方がコスプレ感覚で着て、京都へ来たんや。着物着て写真撮ったんや。はい、さようならでは、ちょっと違うかな、と個人的には思ってます。

司会者 私のほうから、今のポリエステルの着物の話で、ちょうど私のゼミも今年の発表はレンタル着物が和装産業の振興につながるかというテーマでした。これは確かにすぐにはつながりにくいんですよ。しかしポリエステル

の着物を着る中で、だんだん着物を着慣れてきて、いいのに移っていったら、それはそれで方法なんじゃないかとも思います。そもそも着物というのは、保存が難しいとか雨に弱いとか、価格が高いですよね。で、大体普通の今の若い方ですと、成人式か卒業式に着るぐらいで。そういう意味で言うと、確かにこの伝統産業の定義で言うと全くはずれますけれども、あまりに難しく考えすぎるのもどうかと思います。

私が市役所入った頃は昭和53年ですけど、その頃はまだ今よりも需要がたくさんあって。それでもずっと右下がりやったんです。今外国人が着ることによって、日本人も、ファッショナブルじゃないかというんで、結構今、着ているんでね。

八田館長 着てますか。

司会者 だからそここのところ可能性としてどうですかね。全部にはつながらないけど、そのうちの何%かが、本物、よりいいものにつながっていったらいいんじゃないかな。

八田館長 それで、今日産技研から名所さんが、今、タイムリーな企画をやっておられる。織商の若いママ、織屋さんあたりと、いわゆるものづくりということで、ほんまもんに近づけようということ。ちょっとグレードを上げるとか。だけど買える範囲のものを提案してあげるとか、そういうことで、今、動きかけております。それから一つは、京都は先ほど言いました、いわゆる家元とか和の文化やとか何か言いますが、結構うるさいんです。私もポリエステルの着物も着てるんです。時たま、組合行くと、おい、八田はん、おまえ、襟ちょっといがんです、とさわりに来はるんです。「あ、こいつ、今日ポリエステル着とる。」「あ、こいつ、今日、正絹着とるな」とか。何かそういうポリエステルを着てたらいかん、いかんことないねんけども。だからポリエステルの着物、何で受け入れられなくなったかと思ったら、ポリエステルの着物は安もんやというのを誰か言うてしもたんやと思うんですね。ポリエステルでも結構ぱっと見てわからへん着物があるんです。男物の場合、紬やったら、それは新しいシルクとか新しい東レの作った着物もあるんです。女性の二部式の着物でも、ええポリエステル、値段も結構ちょっと高いですけどね。洗濯機で丸洗いでできるさかい、メンテナンスも楽な着物もあるんや

けど、京都人は独特の正絹という一つの妄想という、妄想と言うたら怒られるかな。それから、茶席ではやっぱりポリエステルは着ていけないという一つの暗黙の縛りみたいなものが。あれを誰か打ち破ってくればたったらいいんやけどなと思うのやけども、まあまあ、そこらはちょっと一つの文化的な話になるということで。

質問者 5 大藪と申します。今、白須先生が話されて僕もずっと考えてたんです。ポリエステルの着物っていうのは、僕はどんどん出たらいいと思ってるんです。それは今、おっしゃったように、伝統産業の絹は高いです。高いということが、みんなが一定、伝統産品がどうして高いのか、どうして立派で、いいのかっていうのは理解できたとしても、それを買うということは絶対にできない。特に若い人はできないですね。20代30代の人たち、30代はできても、20代はできない。そういうときに、まずは買ってもらって使ってもら。さっきの置き物じゃないですけども、使ってもらっていう意味では、僕は大切だなと。われわれ、僕も60を過ぎてるんですけども、最初、車買ったとき、最初からクラウン買う人いないです。みんな、カローラ買ったんです。だからそういうつもりで、いって言って、離れてもらってもいいんじゃない？私は漆が専門なんですけれども、漆を漆として売っていても、これは絶対みんな買ってくれない。じゃあ、何に使って、何にもっと汎用性の高いものを作ってもらうかということを常々考えてる。そうすると僕は、着物も入門という意味では、ポリエステルでインクジェットでもいいんじゃないかなとは、常々思ってたんです。で、白須先生おっしゃったように、海外では、国内の若い旅行で着てる人が、結構それ着てるんです。

八田館長 それを見てね、そう。

質問者 5 見て着てるんですよ。今度はそれがまた古着屋行って、買ってこよう。古着屋行くと安いのがあるから。そうすると、この底辺が広がってきて、よくなっていくんじゃないかなっていうふうにはいつも思うんです。今、白須先生がおっしゃったことと、僕はいつも同じ考えを持っています。

司会者 どうでしょうか。今の話でも結構ですし、もっと違う話でも結構です。せっかく今、大藪さんから話いただいた。大藪さんは漆の分野で産業技術研究所でもプロだったんですけど、いろいろ新しい用途も考えられてる

ので、その辺のこと少し大藪さんお願いします。

質問者5 せっかくだから面白いところで、私、これ、消しゴムケースなんですよ。消しゴムケースに漆を塗ってもらって、いいでしょう？

出席者1 すてきです。

質問者5 もっといいのがあるんですけど、例えば、さっき粋だという話をしたときに、反対になりますけど、100円の消しゴムに5000円のケースを使う。

出席者2 5000円ですか。

質問者5 これは違います。これは1000円。

会場 (笑い)

質問者5 僕が買うものだから、1000円。こういったものとか、あと八田さんがおっしゃったように、いわゆる伝産指定をすると、もう絶対そこから出られない。伝産指定には、今、絶対ならないですね。本当の伝産という意味でやると。そうすると、本来の意味の伝統産業と技術技能というのが衰退していくので、技術と技能、材料を含めて何に利用していくかと。それがこういった応用例です。産技研に来ていただくとわかると思うんですが、例えばうちはエレベーターの扉を塗ってるとか、いや、そうじゃなくて、車も塗ろうやとか、そういうことをしてみんなに知ってもらって、やって、その汎用としては、僕はこういうものでもいいんじゃないか。これ結構評判いいんです。1000円だったら高い。1000円だったら安い。買って失敗してもいいと思って買ってくれる。ちょっとぜいたくなランチを食べたつもりで、そういうところからやっていこうと。そのためには今度は技術的な問題が発生するわけですね。そこは産技研の腕の見せどころ。ほかにもいっぱい例があるんですけど、また別の話。

司会者 ありがとうございます。

質問者5 ありがとうございます。

司会者 伝統産業の定義ということで、先ほど八田さんがお話しされた主として日常生活の中で使われるのは、普段使いですね。そうするとだんだん普段使えるような、今の大藪さんの話で、例えばある種のものは、1000円とか3000円ぐらいでできますからね。どうしても着物は高くなるんですけど。

やっぱり大事なのは、普段使い。そのために私が思ったのは、さっきの着物の話に戻りますけど、普段着れるものから入って、本当の伝統産業に入っていくようなかたちのステップでないと。伝統産業全体、京都だけじゃなくて、非常に右下がりになってると。しかしながら、先ほど北野さんから、お話ししていただいたように、若い人が関心があるのは事実なんですよ。その辺の関心とうまく伝統産業とで、すぐに結びつかなくても何か長い間で繋がっていったらいいなと思ってるんですけど、どうでしょう？皆さん、どんなことでも。

司会者 山西先生、どうぞ。

質問者6 山西と申します。いつもお世話になってます。先ほどからのお話、非常に興味深くお聞きしてるんですけども、着物、絹イコール着物とか、そういうふうに固定観念を持ちすぎてるんじゃないかなという、そういう印象があるんですね。例えば突拍子もないかもわかりませんが、西陣織のスーツ、背広があってもいいんじゃないかなというふうに思うんですね。そんな発想で、もう少し今の生活に合うような商品開発を考えていただいても、われわれも考えないかなことですが、いいのじゃないかなというふうに思うんですけども、いかがですか。

八田館長 西陣織のスーツはあることはあるんです。展示会でも出るんです。誰も見向きもしません。それを何とか見向きしてもらうように、今言われたように、もう少し捻り、一工夫。何か直球すぎるんやね。伝統産業のこれをこうしてこれじゃなくて、そこにいわゆるストーリーを作るのか。いやいや、それとも一遍試しにそれこそカローラ、運転初めてする人に、どうやってすんの？という、そういう仕掛けみたいなのも作ってあげなあかんというのは、一つ大事なことやと思います。

質問者6 市長さんに一遍西陣織のスーツ着て議会に出ていただいて。

司会者 住井さん、どうぞ。

質問者2 今のお話聞いて思うんですけども、全部西陣織のスーツでは誰も着ないと思います。でもベストの一部のところに西陣織を持ってくるとか、裏地のどっかのところにちょっと西陣織を持ってくるとか、何か、外はきちっとしたスーツであって、コラボをしていかないと。この間も実はうちと

コラボをしていただいてるフランスのキレの作家の方が来られたんですけれども、ものづくりっていうのはデザイン力だと思うんですね。いかにお客さんから、消費者の方から、これ、欲しいなと思ってもらうものを作らない限り、だめだ、だめだと言ったのでは、だめだと思うんです。やはりそこはデザイン力やと思います。よく中国の方が、うちに、どうしてそんだけ100年と長く続けられるんだと聞きに来られるんですけども、皆さんに言ってることは、職人を守ること、それからあまり自分がもうけようということをしなないで、本当に分けて、みんなが気分よくなるかたちを考えないとまずだめですよっていうこととか。いろんなかたちで、今、中国の方たちも継承の問題で、すごく悩んでおられる方が多いので、結構話を聞きに来られるんですけども、あとはデザイン力だと思ってます。

同じ業種の中で、ともによくなろうというかたちは私はおもに考えています。まして、うちわのほうは、代々、差配する立場ですから、どこのうちわ屋さんであっても、京丸でも新しい安いところが出てきたおかげで言ったらいけませんけども、おかげで逆に言えば、そういった安いところがありひどかったのが、丸亀のほうに行って、丸亀の組合さんに、実は丸亀うちわのルーツはうちなんですよっていう話から全部していくことによって、今、丸亀さんで作ってはる京丸の形を全部整えて、作り方も全部いろんなかたちでご指導させていただいた。おかげで、組合さんとすごく仲よくなって、何かあったときはうちのこともちょっと手伝ってあげるとか、いっぱい、全部自分とこで作ってるには、ちょっとハードすぎるので。

うちのは、うちわは1割で、舞台の小道具が6割で、舞扇が実は3割っていうかたちで。うちは特殊な別注ばかりで、作らせていただいてるし、それである作家もさんばかりやってるっていう。うちに来ないと買えないっていう商品で、実はそれで家内工業的に、そんなたくさんの人数の社員じゃないので、回ってる状況です。でも、結果、ずっと考えて、今、みてるのは、消費者の方が、西陣織であれ、何であれ欲しいなって思われるか。今の漆の件に関しても、これ持っていないっていうようなデザイン力とものづくりをしていかないと。昔のままのものづくりしてたのでは、お扇子屋さんでもそうなんですけども。ただ、これ作って売ったらどうでしょうかとい

うことでご相談されるんですけど。それこそ、皆さんが学生さんたちに募集して、こんなデザインで作ってもろたらどうでしょうかというお話も聞いたんですけども、多分だめだと思いますよ。そうではなくて、必要なものを作るっていうかたちをきちっとしてって、知識的に持っていかれたほうがいいんじゃないでしょうかっていう。広告宣伝費とかいろんなかたちしないでも、あそこのはいいな、あそこはいいっていう口コミで広がってやってるっていうやり方が一番身につけてる話じゃないかなというのがあるので。

西陣の職人さんたちとか、いろんな職人さんたちが相談に来られたときに、じゃあ、私とこの舞台の小道具で使う手ぬぐいを、これとこれって刺繍で頼んでやってもらったり、お茶の先生方を呼んで、オリジナルでやってもらったり。竹の職人さんに直接頼んで、廃業しようと思って悩んでしまったんですけど、何か辞めるの食い止めようと思って、そういうようなかたちで守ったり。今、それで、実は今度ビームスさんからの特別に注文があって、手ぬぐいの竹のほうの今、また注文いただいたので、その職人さんに作ってもらおうとか。何とか職人さんを辞めないように、いろんなところが相談に来はったら、できる限りその職人さんの技術を生かしたものを作るっていうことをやってます。うちわでも染めものの生地をいいところ取りをしてうちわにしたりとか。何か、帯屋さんがやめはるのを聞いて、その帯を私も買ってきて、自分で全部裏、糊で固めて、全部それをうちわにしたら、パリに持ったとき、いいので、ほとんど買っていたいたりとか。何かいろんなかたち、コラボ的にして、守り合いをしていかんと、ただただ一店だけが、悶々としてはっても、どっかで行き詰まってしまうと思うので、何かコラボでいろんなところとの出会いでされたらちょっとでもよくなるんじゃないかなっていうのを思ってます。以上です。

司会者 ありがとうございます。時間もありませんが、せっかくの機会ですので、質問でも、ご意見でも何かございますでしょうか。

質問者7 冒頭、ふれあい館を今後こんなふうにしていきたいとお話をされていたかと思うんですが、あそこ、ものを売ってないんですよね？

八田館長 いえ、売ってます。

質問者7 いや、展示品は。

八田館長 売るようにしたんです。

質問者7 売るように、今はされてるんですか。ちょっとそのあたりも含めてどんなイメージになるのか。

八田館長 3年前、展示してるだけで、市長はじめ理事長のほうから、「値段つける」いやいや、これ、組合の収蔵品ですから、いや、そんなら収蔵品は下げて出展はそれぞれ組合に任せて。じゃあ、清水焼のところは、今日は青窯会（せいようかい）、今日は五条、山科、青窯会などが自分とこが持ってきて値段をつけて、漆器のところも全部、自分とこの値段をつけて、今売ってます。だからこの頃、海外の方、カード決済もできるようにしました。ですからこの前、版画なんて、1人でイギリスの方、5枚ほど、全部で10万円超えてたかな。買うていかはった方もいあります。

司会者 今後の新たな展開の仕方をどう考えられていますか。

八田館長 新たな展開としてはそれを中心に、そういうコーナーと一品コーナーと、分けていこうかなということと。今、のんびんだらりと置いてますけども、例えば食に関するとこ、例えば祈りに関するコーナーとか、いつでも仏壇仏具と神祇調度とかそういうものを、少しまとまりのあるかたちにちょっと置き換えなあかんという。今、正直なことというか、20年間、置き方と置き場所全然変わってへんのです。西陣織がどこにあらうが、友禅がどこにいが、それとも例えばちょうちんがどこいがとか、竹がどこいがとか、そういうものを少し系統立ってちゃんとして。そこで例えば、値段もちゃんとつけるコーナーと、それから楽吉左衛門さんとこのいわゆる千家十職のやつはガラスケースに入れて、ああ、これはすごいもんが展示してあるな。というコーナーとそれと分けて、ハレの場とケの場。そういう改装をしないと、今、案を立てております。

質問者7 三条に京都府も同じようなもの持ってはるじゃないですか。

八田館長 あれは伝統工芸大学校という。

質問者7 あれ京都市じゃなく大学校ですか。

八田館長 大学校なんです。あれ、民間。

質問者7 あれは民間になるんですか。

司会者 どこのところですか？

八田館長 烏丸三条の。

司会者 最後どちらかどうでしょうか。そしたら次の方どうぞ。

質問者8 どうもありがとうございました。貴重なお話をお伺いさせてもらって。また戻って着物の話なんです、私、産業技術研究所で、主に染織業界の担当しておりますけれど、確かに着物のところで、要するに先ほどからもあったように、私も着物は絹、そら絹でいいとは思うんですね。いいものを、本来のいわゆる従来からのずっと流れをくむ着物の素材としては、絹がいい。だけどさっきの伝産法の話じゃないですけど、日用品ということになると、絹というのは、素材としても扱いにくいとかいう欠点がありますので、その部分の技術開発は今、産技研のほうでもやっております。だけど、今、われわれの着てるもので、要するに絹100%のものを、ジャケットお召しになられてる方がなんばおられるかという話とも通じるかと思うんですね。だから、絹かポリエステルとかいう二極じゃなくて、私が思ってるのは、こういう洋装地でもいろんな素材がある。それを目的に応じて、着物もそうですし、なるべく着物が日常品になってくると。その目的に応じて、素材が変わってもいいんじゃないかな。だからいろんな素材の着物があってもいいし、そういう選択肢を増やすことが、消費者からの注文も得られるんじゃないかなというようには今、思っています。

一つは手作業で従来の技法を守りながら、そういう素材にチャレンジするとき、産技研としては、技術的な支援のフィールドができてくるといふうに今考えてます。それともう一つは、これは私らで対応はできないところで、着物業界の構造です。従来からいわれている着物業界の構造が、新たな着物業界が新たなところにチャレンジしようとするところをそれ自身が阻害してるというか。こない大きい言うたら悪いかもしれませんが、そういう動きが、そういう感じがする。だから、八田さんでなくても、ここにおられる大学の先生方になるんですけど、何か新しいところに、着物業界の構造が阻害しているのであれば、例えばこういうような新たに何かチャレンジするのに適したような、ちょっとわからないですが、何か例えば提言みたいなものをいただければ大変ありがたい。そういった中で、着物のものづくりの新たな流れもできてくることがあるのではないかというようなことを、勝手に

想像しております。正解かどうかは全く、私の個人的な感じというところでして、やはりものづくりのところはものづくりのところがあるにして、ものづくりのところだけで業界がすべてよくなるんじゃないくて、さっき八田さんのスライドであったように、作り手と使い手というところがありますし、その間に商という部分が介在するのは、これ、事実ですから。商と工、そこが先ほどお話しのように全体的に盛り上げていかなあかんというご意見もありますし、そういうようなところに持っていくために、意識改革、あるいはそういう構造的なところに持っていくにはどうしたらいいのか。そういったところで日々、悩んでる。何かまた皆様方からのお知恵なりを拝借できれば大変ありがたいと。勝手なこと申しまして、すみません。

司会者 ありがとうございます。それでは予定していた時間がまいりましたので、これで第1部の京都工芸サロンのほうはお開きにしまして、次、先ほど申しましたように別の場所で交流会を用意しておりますので、ぜひ意見交換を引き続きしていただきたいというふうに思います。八田さんからお話がありましたけども、相当思いつくいろんなことを京都市もやってますし、日本全体でやってます。ただ、なかなか伝統産業の回復につながらなかったけれども、クールジャパンとか、京都に文化庁が来るということで、今、非常に伝統産業にとって追い風になってるといいますか、いい機会だと思っています。そういった意味で、今日は八田さんもそうですし、産業技術研究所副理事長の森川さんに来ていただけてますし、またいろんなかたちで、大学のほうでもこういう講義で教えていただけてるわけですし、まさに産官学といえますか、これが一緒になって伝統産業、京都の一番重要な歴史的な産業ですので、振興していくことができると思います。本日はどうもありがとうございました。

会場 (拍手)

司会者 それではこれで一旦終わりますので、場所を移しますので、ぜひご参加の方はよろしくをお願いします。